

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2875001501		
法人名	医療法人社団 恕和会		
事業所名	カルム箕谷		
所在地	兵庫県神戸市北区山田町下谷上字かんじや7番3号		
自己評価作成日	令和2年11月10日	評価結果市町村受理日	令和3年1月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 コミュニティ・サポートセンター神戸 (CS神戸)		
所在地	兵庫県神戸市東灘区住吉東町5-2-2 ビュータワー住吉館104		
訪問調査日	令和2年11月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・居心地の良い場所を目指し、入居者一人ひとりの生活歴を把握し、個性を尊重した個別ケアを心がけている。・共同生活の中で役割を持ち生き生きと過ごせるよう自立支援をしている。・地域の一員として、安心安楽で穏やかな生活が送れるよう支援している。・母体である松田病院、すずらん病院、併設の訪問看護ステーションと連携し、日々の体調管理を行い、異変の早期発見、急変時の迅速な対応を行っている。・今は新型コロナの影響で休止しているが、地域交流として併設のデイサービスで催されるボランティアの出し物を観たり、中学生のトライやるやボランティアの受け入れを行っているので、元の生活に戻れば早急に再開していきたい。・庭で実る野菜を収穫し、調理して食べたり、四季折々に咲く花々を楽しめる。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍で地域との交流は中断し、外出も家族との面会もままならないが、入居者は職員と歌やフラダンスなどを楽しんだり、テラスでのプランターの野菜や花の水やり、そして収穫した野菜を使った食事や、たまに出勤を取るなど、日常生活を楽しんでいる。今は、テラスにクリスマスのイルミネーションを飾り、夜もリビングから楽しむことができ、生活に彩りを添えている。また家族等との面会も、スマホの動画通話や窓越し面会などを考えだし、家族には入居者の近況を伝える写真入り葉書を毎月送り喜ばれるなど、入居者一人一人を大事にした介護に努めている。このような工夫は、職員のアイデアによるところもあり、職員が明るく生き生きとし、意見を出しやすい職場環境をつくったことも、コロナ禍での事業所運営に効果を上げている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および第三者評価結果

グループホームカラム箕谷

評価機関:CS神戸

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	前年度よりネームプレートの裏に理念を入れていつでも確認することができる仕組みを継続している。地域医療に根ざした創設者(松田病院)の思いを継承し、振り返ることができるように、フロアにも理念を掲示している。	グループホームの理念と7項目の運営方針を事業所内に掲示し、理念は名刺大カードに印刷して全職員が携帯している。理念、運営方針は会議等の場で唱和してはいないが、ケアで悩んだ時などに立ち戻る原点として、職員と個々によく話し、共有している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナの影響で外出や面会ができない状況にあり、日常的には交流できていない。敷地内を散歩するときに、隣家の方と挨拶をする程度となっている。本来ならカラオケ大会を催し、地域の方々に参加していただく予定であった。	開設後15年間経ち、近隣住民や店舗との交流、ふれあい喫茶、ボランティアやトライやるウィーク受入れ等、地域との付き合いは深い。コロナ禍の今は休止し、職員と入居者でフラダンスや歌、ハロウィンの仮装などを盛大に楽しんでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の開催やデイサービスの催しへの参加を自粛しており、地域の方々との交流ができない状況下で、認知症の人の理解や支援の方法を活かすことはできていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を8か月ぶりに10月に開催することができた。感染防止対策を講じ、飲食禁止、家族と利用者は不参加とした。貴重な時間であり、上がった意見等、真摯に検討し、現場で反映、実践していきたい。	運営推進会議は隔月開催し、必要なメンバーが揃い、活発に意見交換してきたが、新型コロナウイルス感染防止のため4月に中止した。10月には再開できたが、12月は再び中止となった。中止期間中は近況を出席メンバーに電話で報告している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	変更や届け出等があれば今までと変わらず、足を運び直接手続きしている。他には調べてわからないことなど、電話で質問している。	介護保険関係のほか裏山の用水路からの出水対策やバイパス工事の問題などもあって、市役所には以前からよく足を運び、担当課・関係課との情報交換・連携を密にしている。地域包括支援センターは運営推進会議に出席し、入居相談の紹介などで連携している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	今年で3年目、3ヶ月に1回、計年4回の身体拘束廃止の委員会を開催し、議事録を各フロアに回覧している。研修も年2回は必ず実施しており、知識も定着しつつあるが、今年度は医療処置保護のため拘束を行うことになった。	年2回身体拘束の研修を行う。玄関とユニット入口は昼間は施錠せず、出入をチャイムで確認する。外出しようとする方には職員と一緒に出たり、お話で気分転換する等の対応をする。センサーマット等を使う時は家族の承認をもらい定期的に必要性を検討する。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に1度全員参加の研修実施。ケアの見直し、振り返りを行い、意識を持って取り組んでいるが、毎日の繰り返して慣れが生じ不適切なケアから虐待へと発展しないよう、気軽に話し合える関係づくりに努めている。	年1回虐待防止の研修を行う。不適切な言動やケアがあればその都度注意し、ミーティングでも振り返る。職員の心の健康にも注意しており、ストレスのセルフチェックをして産業医との面談に繋げる仕組みがあるが、今年には要注意に該当する人は居なかった。	
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	新しく入居される方の契約時に後見人制度についての案内を行い、必要に応じてパンフレットを配布している。今年、後見制度を利用している方が入居された。今年度も12月に内部での研修を予定している。	成年後見制度を利用する人は過去に2人居たが、今年には司法書士が保佐人で付いている方が1人入居した。権利擁護に関する制度のパンフレット等は常備している。内部講師の権利擁護制度に関する研修を予定している。	成年後見制度等に関するニーズは増々高まっていくと予想されます。外部の専門家を招くことも含めて今後も研修を継続し、職員の理解を深めていくことを期待します。
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は一つ一つ時間をかけて説明し、その都度疑問がないか確認している。時間がかかりすぎると記憶に残らないことがあるため気をつけている。また、わからないことがあればいつでも問い合わせていただくようお願いしている。	契約時は契約書、重要事項説明書などの重要箇所は読み上げるなどして、質疑応答含め最長2時間位かけ丁寧に説明している。長期入院した場合の居室確保等についても、医師の判断に基づき柔軟に対応することを説明し、納得頂いて契約をしている。	
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常の連絡等での家族との会話で気になる点などないか確認している。話がしやすい雰囲気づくりを心がけ、思いを引き出すよう努力している。最近ではコロナの影響で話す機会が減り、反映する事案が少ない。	面会等の来所時や運営推進会議への出席時、春と秋の家族会などで意見、要望を聴き取り、運営に反映しているが、今年にはコロナ禍でその機会がほとんどなくなっている。家族には入居者の写真入りで近況を伝える葉書を毎月送り喜ばれている。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	意見があれば随時上長に上げてもらっている。提案があれば実施、実践できるか精査、検討し、提案者にどうしていくか返している。	職員の意見はフロアミーティング等会議の時だけでなく個別に話をしたり、スタッフルームに用紙を置き、書いてもらう等して運営に反映している。今年には感染防止の為、職員が着替える場所を併設事業所と分けることが提案され、直ちに実行した。	職員が意見を出しやすい風通しの良い職場環境を維持されています。今後もスタッフの工夫やアイデアを活かした事業所運営を続けられることを期待します。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	賞与時期の面談で聞き取りを行い、管理者から代表者へ伝達。代表者が検討し、提案や助言を職員に返し、気持ちよく働ける職場環境を提供するよう努めている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度は外部の研修は受講できていない。自発的にスキルアップを目指せるよう、助言している。内部で接遇や危険防止等の研修、勉強会を実施し、認知症については毎月短時間ではあるが勉強する機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	施設外の交流を控えている状況で、今年度は現時点で機会がない。通常なら神戸市北区のグループホーム連絡会を通じ、他施設の活動を参考にしたり、他施設の研修参加に乗じて見学させてもらい、感じたことを持ち帰っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	できる限り多くの情報を得てケアプランに生かせるよう、話しやすい雰囲気づくりを心がけている。趣味嗜好や困り事、望む暮らし等々を聴き取り、職員間で情報を共有し、入所後も不安にならないよう配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学から入所に至るまで、ご家族が不安や疑問等を気軽に話せ、きちんと対応することで安心できる場と捉えてもらえるよう、コミュニケーションを取り、信頼関係を築く努力をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今年度は独居でかなりのサービスを自費で負担していた方が入居となった。グループホームでどのようにサービスを提供できるか、よりよい生活につなげるためにチームで日々検討、格闘している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	身体介護が増え、職員も腰や手を痛めることが多くなってきた。入居者の拒否によって一層の負担が介護者にかかることもあり、共に協力し合って乗り越えることができる関係性を大事にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の力が必要な時は事情を説明し協力を呼びかけている。困ったことがあればどう対処すべきかを相談、意見をいただいて対応策を検討し、実践後の達成感を一緒に味わってもらっている。		

自己	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会制限や外出自粛等、コロナ禍において関係継続が難しくなっているが、せめてご家族には呼びかけて、テレビ電話や窓越しでの面会等、できる範囲で協力をいただいている。	以前はふれあい喫茶に参加したり家族と昔馴染みの店に出かけていたが、コロナ禍の今は途絶えている。春から中止の面会は緊急事態宣言解除後に再開し、感染増加で再び中止となったがスマホの動画通話や居室窓越しの面会などの工夫をこらしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	元々の性格や認知症等により、コミュニケーション能力に差がある中でも、職員が間を取り持つことで楽しく会話ができ、助け合って、一緒に暮らしているという実感が味わえる生活空間にしたいと考えている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	外出回数が大幅に減り、退所された方のご家族に出先で出会う機会はほとんどないが、書類や忘れ物等、連絡が必要な時には、どう過ごされているか等、世間話ついでに近況を聞かせてもらっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話から本人の望む暮らしを聴き取り、生活の中に取り入れる工夫や、ご家族からお話を伺って、可能な限り、本人主体のケアを実践している。	入居時に家族から聞き取り、前ケアマネ、施設などからも情報を得ている。介護計画見直し時には本人、家族と話し合っている。生活の中での会話からも気づくことがある。思いを伝えられない方には表情や、様子から判断し、パソコンに入力し情報共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居して何年経ってもわからない部分があるので、本人と普段から話をしたり、ご家族に生活歴や環境を再確認したりして、今現在の本人にとって、よりよいサービスが提供できるよう、心掛けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	時間の過ごし方はまちまちであり、体調や気分によっても違ってくる。本人の意向を聞いた上でやりたいことができるよう声掛けし、楽しみながら自分の力を使って生活できるよう支援している。		
26	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	今までとは表情や行為等に変化が見られる方、また、骨折や疾病での入院で生活状況の変化が見込まれる方等、チームでケアについて検討し、ご家族の意見も聴き取って、随時計画に反映している。	計画書は3か月ごとに理学療法士を加えて、モニタリングを行い見直している。家族、職員、看護師を交えて担当者会議を行い、出席できない場合には電話で意見を聞いている。できることできないことを見極め支援の内容を決め、個別性を重視している。	

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気付いたことがあればパソコンの個別記録に残している。その記録や職員の情報を元に評価を行い、カンファレンスで検討を重ね、次の計画に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	今までに施設で経験のないことが発生しても、職員や関係者から意見をもらって検討し、実現できるよう努力している。新しいことへの取り組みが抵抗なくできるよう職員に対しても指導している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍において地域との関わりが希薄になっているが、入居者がコロナに感染しないよう、施設内の各事業所、運営推進会議の出席者等々、協力をいただいて入居者の安全が保たれている。		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所の際に希望の医療機関があれば継続していただくようお願いをしている。希望がなければグループ病院にて月一度の外来もしくは訪問診療を受けてもらい、それ以外で何かあった時にすぐに対応してもらえる関係性ができている。	入居時にかかりつけ医を選べるが、グループ病院の協力医にする方が多い。協力医の内科は月2回の外来、または往診、歯科、歯科衛生士は2か月に1回の往診、訪問がある。他科受診は家族対応であるが職員が対応することも多く、結果を家族に報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療面で気になることがあれば連携が取れている訪問看護ステーションに連絡し、24時間体制で訪問や指示をいただいている。急ぎでないことも事業所内の申し送りに記載し、順次対応してもらっている。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院となれば、地域連携のワーカー、家族と連絡を取り合って現状を把握し、治療の進行状況やリハビリの開始、目標到達、退院に至るまで情報を共有し、段取り等スムーズに事が運べる関係性を築く努力をしている。	新型コロナ感染予防のため、入院時に地域連携室に介護サマリーをFAXで送っている。本来なら見舞いには頻回に行くのであるが今は行けず、電話で状況を確認している。退院時には事業所での生活を安心して送れるようにカンファレンスに参加している。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事あるごとに本人、家族と話し合う場を持ち、望む最期を迎えることができるように、医師、看護師、PT、ST、職員等関係者と情報を共有し、ケアに当たっている。	契約時に医療体制と看取りの方針を説明し、容態変化の度に家族と話し合い、家族の意向によって看取りも行う。今年も一人が安らかな最期を迎えられた。他に突然死された方がいて、延命措置の要否等を事前にお伺いすることを検討している。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	家族に急変時の意思確認を行い、いざというときに職員、訪問看護師が的確、スムーズに対応できるよう、意向表をまとめている。職員が慌てず対応できるよう、折に触れ、手順等の確認をしている。		
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は年に2回実施。最近は大変大雨が降ることがあり、溜まった水をスムーズに排水するパイプを職員全員が設置できるよう取り組んでいる。避難は外へ出る方が危険を伴う可能性が高いため、内部での備蓄を備えている。	年に2回避難訓練を行い防災について考える機会を持っている。大雨の時に裏山から出水があり、対策工事で危険はほぼ回避されたが、職員誰もが排水ポンプを扱えるようにしている。職員からの意見も加え皆で検討している。運営推進会議でも報告をしている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	同じ認知症でも人それぞれ出現の仕方が違い、もともとの性格もあいまって感じ方は千差万別である。オンリーワンケアで各々の個性を尊重し、見合った対応を心掛けている。	入室時や私物に触る時には本人に声をかけ了解を取っている。入居者に声をかける時は苗字が基本であるが、信頼関係や状況を考え、その方に喜んでもらえるような呼びかけをしている。馴れ馴れしい言葉や不適切な言葉があれば適切な言い方を話し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	普段から入居者一人一人の表情、動向等、アンテナを張っている。声掛けでどうしたいか確認し、自立を支援しながら、本人の思いのサポートをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	必ず本人の意思を確認している。共同生活を送る上でできれば一緒に時間を共有してもらいたいときがあるが、本人が望まなければ無理に誘うことはしていない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2か月に1回は訪問理容で頭髪をカットしているが、間にどうしても切りたいと希望があれば、その都度来てもらっている。衣類も本人の好み、気分に合わせて、可能な方は選択してもらっている。メイクも希望に合わせている。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者にお手本を見せてもらい食事の準備をすることも。ほとんどの方が楽しみは食べる事といっても過言ではなく、みんなで同じものを食べる時間はとても大切な時間となっている。アクティビティで手作りのおやつを作ったりしている。	業者から温めればよい状態に調理され配達されている。入居者と一緒にひと手間加えたり、菜園で収穫した野菜で一品作ったり、季節のメニューを作ることもある。おやつは月に2~3回作っている。今は外食ができないのでたまに出前を取って変化を持たせている。	

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量とも随時記録に残し、就寝までに必要な対応を取っている。毎日集計し、翌日の排泄にも関係してくるため、必ず申し送っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	目標を立てて口腔ケアに当たっている。毎月歯科医から指導を受け、入居者の口腔内を清潔に保ち、健康で、おいしく食事が摂れるように努力している。		
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンをチェック表で読み取り、事前に声掛け、誘導している。拒否があってもトイレに行ってもらえず失敗することもある。声掛けに応じてくれて成功することもある。職員は試行錯誤しながら、対応に当たっている。	排泄パターンを把握し声掛けをしている。夜間もできるだけトイレ誘導をしている。誘導しても失敗が多くなるなど、入居者の様子をカンファレンスで話し合い、おむつ、パッドの使用を検討して決めている。声掛けで意識ができた布パンツに変わった方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表があり、職員全員が把握し、いつ何をすればよいか、できるだけ薬に頼らず、自然排便を獲得するため、状態に応じて冷たい水、運動等、積極的に取り組んでいる。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週に2回の入浴を計画に載せているが、入浴拒否の方や体調不良の方等、臨機応変に工夫しながら、入浴の楽しみを感じてもらえるよう配慮している。季節のお湯も個々によって検討しながら実施している。	週2回は入浴できるようにしているが毎日入る方もいて、希望や体調に合わせて臨機応変に対応している。決まった職員の介助でないと入浴しない方もおり、その職員で対応している。入居者に合わせて季節の湯や入浴剤を使って楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	浮腫軽減の為に日中に臥床が必要な方、若い頃、子供の世話で夜間に起きているのがくせになっている方、個々によって睡眠、休息のタイミングは違うので、それぞれに応じた対応をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	新しい薬が処方されると薬情を確認、様子を記録に残し、次の受診で報告している。職員一人ひとりがすべての薬剤を把握できてはいないので、努めていきたい。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ボランティア等、外部からの支援を受けることが出来ない中での生活を強いられている。今、職員が楽しみ事を企画したり、日々の暮らしで笑顔になることができることを考え、実践している。		

自己	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今年に入ってから外出がままならぬ状況下であったが、マスクをして散歩に行けるようになってきた。今は気候も良いので機会を増やしたい。また、気軽に庭で外気を吸ったり、実った野菜を収穫している。コロナが収束したら徐々に出かけたいと考えている。	コロナ感染予防のため外出は行っていない。施設の裏側にテラスがあり、テーブル、椅子を置いている。プランターの菜園もあり、水やりや、収穫を楽しんでいる。その周りは広い駐車場になっており、裏山の紅葉が見え自然を感じられ、時々散歩をしている。	外出ができない状況が続いています。室内でのレクレーションや、テラスでの日光浴と工夫をされていますが、外気に触れる回数をもう少し増やす工夫を期待いたします。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い出しに行くことがなくなり、お金を扱う機会がなくなっている。入居者のほとんどの方がお金について話されるため、重要性を感じている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	心配事や要望があれば電話で家族と話すことができる。月に一度の家族宛はがきにメッセージを書く方もいる。自分から手紙を書きたいと訴える方は今はいない。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	四季を感じとれるように季節に応じた飾りをアクティビティで入居者とともに作成し、目の付くところに貼っている。今は換気という点もあるがカーテンや窓を開けて外の空気のおいさや温度、また、明るさを感じてもらったりしている。	リビングはテラスに面しており日当たりがよく明るく暖かい。入居者から眩しいと言われカーテンで調節している。湿度計を置き加湿に気を配っている。ボードに敬老会の写真や、皆で作った季節の装飾を飾っている。テラスには電飾を這わせ夜も楽しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアに何か所かソファを置いており、話の合う者同士で会話や歌をうたって過ごされている。また、一人で本棚の前に座って本を物色したり、動線が歩きやすい作りになっていて運動の為廊下を何周か歩く方もいる。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族の希望で写真やお位牌、自分で作った編み物の作品、在宅でよく座っていた椅子等、大切な品を居室に置き、自分の部屋という認識の中、落ち着ける空間づくりに配慮している。	洗面台、ローチェスト、エアコン、ベッド、不燃性のカーテンが用意されている。整理ダンス、椅子等好きなものを持って来て、写真等を飾ったりしている。入所後も本人の希望で家族が追加でいろいろ持ってきている。以前お坊様に経をあげてもらった方もいた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	食堂に本棚があり、読みたい本を自分で選ぶことができる。CDも何枚か置いてあり、好きな曲をリクエストできるようにしている。エアロバイクがあり、自ら希望し、職員見守りにて運動ができる。掃き出し窓で庭に出れるようになっている。		